ユニセフ
大阪通信
Unicef Osaka Newsletter
大阪ユニセフ協会ニュースレター　2020年8月15日発行
vol.20 No. 79

CONTENTS

シリーズ　この人に聞く　第21回
2-3 和宗総本山四天王寺　南谷恵敬さん
募金する心

topic
4 日記に書かれた戦争

活動紹介　No.32
5 オンライン授業初体験記

6 活動フォトニュース

7 活動日誌（5月～7月）

四天王寺夕陽丘保育園の子どもたちは、この日4カ月ぶりの園外散歩。いつも訪れる四天王寺の六時堂前で手を合わせる。0歳から入園した子もいる。四天王寺さんに見守られて、年長児は来年小学生だ（撮影：堀越善孝　6月5日）

募金する心

和宗総本山四天王寺 執事・勧学部長
南谷（みなみたに）　恵敬（えけい）さん

1953 年生まれ。1960 年得度、四天王寺院施行院住職。大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻修士課程修了。著書に『聖徳太子の寺を歩く』『四天王寺（考古学ライブラリー 62）』『日常の中の仏教用語』など。

ユニセフ募金にも門戸を開放して下さっている四天王寺。その四天王寺にこの 10 年足らず募金活動に行きながら、四天王寺の歴史や背景はほとんど知らずにいたのですが、このたび和宗総本山四天王寺勧学部長の南谷惠敬氏のお話を聞く機会がありました。南谷氏からお聞きしたことも織り交ぜながら、四天王寺での募金活動やボランティアについて考えました。（ボランティア堀越善孝）

弱者へのいたわり

四天王寺は大阪市街地の東に南北に連なっている上町台地の東端にあります。この地はかって大阪湾に沈む美しい夕陽が見られたことから、夕陽丘の地名が残っています。昔から西方浄土をのぞむ聖地と考えられ、四天王寺をはじめ聖徳太子創建とされる由緒ある寺院が多いところです。

四天王寺は 593 年の推古天皇元年に、聖徳太子が創建されたとする日本最古の官寺です。太子が蘇我馬子とともに、廃仏派の物部氏と戦ったとき、白膠木（ヌルデ）の木を削り、四天王寺像を造り、戦勝後に難波荒陵の地に、大伽藍を建立したのがはじまりと言われています。「四天王寺式」という伽藍配置が特徴で、中門五重塔・金堂・講堂を一直線に並べ、回廊で囲んでいます。台風や太平洋戦争の戦災などで堂塔の大部分を失ったものの、戦後、創建当初の様式で再建されました。広い敷地の境内には、中心伽藍のほかに、太子を祀る聖霊院、重文の六時堂、五智光院、本坊方丈などが立ち並んでいます。日本三舞台の一つの石舞台や極楽の入口とされる石鳥居、本坊庭園など見どころが多くあります。

谷川健一氏の『四天王寺の鷹』には「弱者に対する愛は聖徳太子にはじまる。癩者（らいしゃ＝ライ病の人びと）の救済に挺身した僧・忍性（にんしょう）は鎌倉時代の永仁 2（1294）年に四天王寺の別当という役職につき、かたわら悲田、敬田の二院を興したとされる。僧・忍性に限らず、貧者や病者へのいたわりは、聖徳太子由縁の他の寺には見られない四天王寺の特色であった」と記されています。

寄進と喜捨

仏教とボランティアは表裏一体のようで、御布施で人に施しをしたり、自分の持っている物を人に与えたりしています。なかには貧しくても貧者の一灯で、人に尽くしている方もいます。仏教には「生きるための糧以外、余分な物は人に与えよ」という教えもあります。このような寄進は昔からありました。貧しい人でも寄進をしているし、余分な物を捨てる喜捨も大切です。

人間には、人に恐れを与えず、安心させたいという気持や、人を助けたい、人に尽くしたいという気持があります。これが募金行為にもつながるのでしょう。

外国人は一般的に宗教心が強く、人のために尽くしましょうと教えられているようです。これは公共心を養う学校や家庭の教育の問題とも言えるでしょう。

また日本人は災害が起こるとボランティアに参加したりしますが、日常的な活動は弱いようです。やはりボランティアは増えたほうがいいでしょう。そして格差が出ればと助けないといけません。日本も格差社会になっています。ギスギスした心や差別、偏見が生まれています。せめて災害のときには思いやる活動をしていきたいと思います。全体的には裕福なのに、心は貧しい日本ですが、なんとかしたい。日本は良くなると思いたい。

四天王寺でのユニセフ募金の額が増えているというのは、四天王寺に来る方々は宗教心があり、募金する方が多いからかもしれません。経済危機、紛争、新型コロナ感染症など、不安だらけの世の中ですが、人間の良心に期待して頑張りたい。世の中を良くするためには、国民のために働く議員を選挙で選ばないとい

けないと思います。

四天王寺の心

一言で言うと、聖徳太子の教えであり、「和をもって尊しとする」考え方です。仏さんを敬うのは結局一人ひとりを敬うことになります。仏教精神を高めることも大切と思います。

四天王寺には四箇院事業があり、敬田院では今、四天王寺学園を経営して、国際的視野の仏教教育を実施しようとしています。また、悲田院、施薬院、療病院の各事業も発展させています。悲田院は養護老人ホームとなり、羽曳野の悲田院はじめ24施設があります。すべて苦しい人たちを助けるための施設です。なお悲田院は隋にあった悲田院にならって、聖徳太子が創られたものです。施薬院は病気を治すための施設で、四天王寺病院になっています。これらは仏教の慈悲の思想に基づき、貧しい人や孤児、老人、病人を救うための施設です。聖徳太子1400年事業まであと2年です。太子の御精神も広めてゆきたいです。

今、日本はこれまでの蓄積で生きていますが、国際的地位は低下しています。人口も減少しています。生活が苦しくなって、結婚しづらくなり、女性が安心して子どもを産める状況ではないようです。子どもの貧困も増加しています。

日本のユニセフも自国の子どもにも援助の手を差し伸べるべきかもしれません。余力のある人は少しでもいいので、力を貸してほしい。みんなが助け合って安心して生きていける社会を創って行きましょう。

最後にわたしたちユニセフボランティアも頑張っていきたいものです。

参考文献

1）谷川健一，四天王寺の鷹―謎の秦氏と物部氏を追って，東京，河出書房新社，2006年，625p.
2）林　豊，大阪を歩く　大阪市内編―史跡名所探訪，大阪，東方出版，2007年，138p.

四天王寺 募金活動の感動

2019年6月22日の募金活動は大変印象的でした。ふだんは3人でしていますが、この日は大阪教育大のインターン生とアメリカの現地校に通っている高校生も参加して、8人での活動でした。いつもは1つの募金箱を3つに増やしました。高校生はじめ、皆で募金を呼びかけました。毎月21日は常連の方もいてそこそこ集まるのですが、22日は参拝客が極端に少なく、5時間頑張っても21日の1/5程度の2,000～4,000円が多いのです。

ところが……。

この日は多人数で頑張ったせいでしょうか、なんと14,728円にもなりびっくり。募金は大人数で、元気よく取り組むと成果が上がるようです。

四天王寺に長年通っていると、顔なじみの方ができて、会話することもあり、楽しいことや驚くこともあります。4年以上毎月千円を募金されている年輩の男性が、2回1万円募金されたので、理由を尋ねると「お金が入ったのでおすそ分けです」「拾って交番に届けたら戻って来て、そのまま使うのは心が痛むので」と言われました。また、ミカンなど境内で売っているものを差し入れて下さる女性。電車の缶バッチを必ず数個選ばれる“乗り鉄”の方。向かいのテントには、20年以上ユニセフ・マンスリーサポーターをされている古物商のご夫婦がおられ、なにか売れるたびに募金してくださいます。

こんな善男善女と親しく、楽しく語りながら募金活動できる幸せを大切にして、これからも頑張っていきたいものです。

（堀越善孝）

（大阪通信75号「Bravo」欄に掲載記事を再録しました。）

四天王寺の募金風景。中国出身のボランティアと参拝客が缶バッチを手に、中国語で話が弾む（撮影：堀越善孝）